ラフカディオ・ハーン旧蔵書『ギリシア詞華集』英語版の書き込みについて　②

―　セミとキリギリスに関する詩を中心に　―

中　島　淑　恵

富山大学人文学部紀要第69号抜刷
２０１８年8月

ラフカディオ・ハーン旧蔵書『ギリシア詞華集』英語版の書き込みについて　②

―　セミとキリギリスに関する詩を中心に　―

中　島　淑　恵

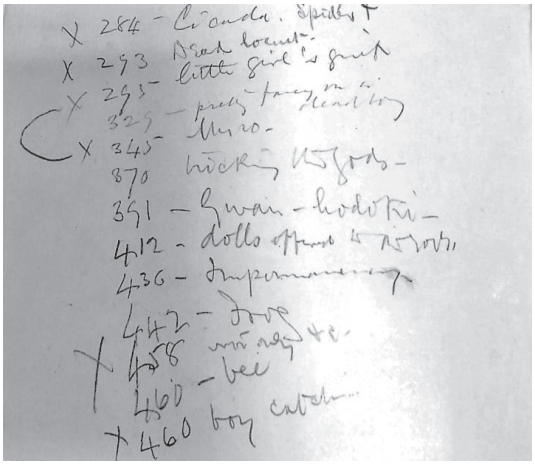
承前

本稿は，富山大学附属図書館所蔵のラフカディオ・ハーン（小泉八雲）旧蔵書（ヘルン文庫）所蔵の英語訳『ギリシア詞華集』（書架番号[302]*The Greek anthology : as selected for the use of Westminster, Eton and other Public schools / literally translated into English prose, chiefly by George Burges, to witch are added Metrical Versions by Bland, Merivale, and others, and an index of reference to the originals*, London, G. Bell, 1893.）の書き込みについて，裏見返し左側の書き込みのうち，284頁から460頁までの考察を行うものである[1)]。

1. 裏見返し左側の書き込み

ここで再度同書の裏見返し左側の書き込みのうち，284頁以下の部分に書かれていることを確認しておきたい。

× 284 - Cicada, Spider +
× 293 - Died locust
× 295 - little girl's grief
329 - pretty fancy on a dead boy
× 345 - Myro
370 - tricking
391 - Gwan-hodoki
412 – dolls offrend is wrong
436 – Impermanency
442 – frog
× 458- not only
460 – bee
460 – boy cathes



【写真 1】

これまでの調査によれば，左の数字は該当頁数を表し，その右のコメントは該当頁に収録された詩のテーマを示していて，該当頁の余白には傍線が引かれていたり，その他のコメントがメモされていたりすることが多い。また，さらに左側に記されている×印は，とりわけハーンの関心を惹いたものであることが多い。以下，それらの書き込みと詩の内容について，確認を行っておきたい。

2. 本文該当頁の書き込みとその内容

この箇所では，とりわけセミやキリギリス[2)]など，昆虫に関する詩が多く見られる。そこでまず，セミやキリギリスが取り上げられている，284頁，293頁，295頁，345頁，458頁，460頁のそれぞれの詩についてまとめてみておきたい。

2－1. 284頁

284頁の詩は詠み人知らずの詩で，クモの巣に捕らえられたセミを詩人が解き放って詠う，という趣向をとった以下のような詩で，余白に傍線等の書き込みはない。

A spider having woven its thin web with its sli(m) feet caught a tettix, hampered in the intricate net, did not however, on seeing the young thing that love music, run by it, while making a lament in the thin fe(t)ters; but freeing it from the net I relieved it, and spok(e) thus- –“Be saved, thou, who singest with a music noise.”[3)]

クモが自らの細い脚で薄い巣を編み，入り組んだ網に捕らえらえたセミにいまだ襲い掛かってはいなかったところ，私は音楽を愛するこの幼きものが，その薄い罠にかかって嘆いているを見て，その巣から解き放ってやった。そしてこのように言った。「楽の音をもって歌っていた汝よ，救われよ」

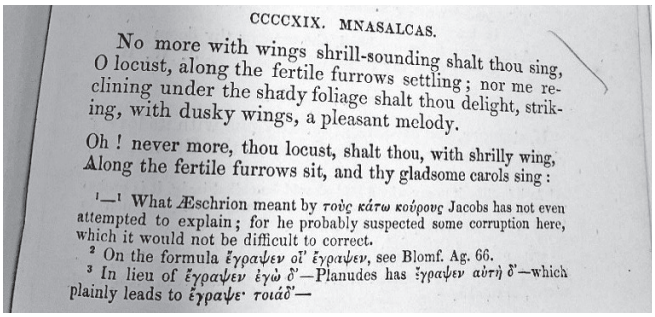
裏見返しの書き込みには，「× 284 - Cicada, Spider ＋（× 284 - セミ，クモ ＋）」とあり，セミとクモに関する詩であることのほか，ハーンがとりわけ関心を抱いたことを示す×印もついている。

この詩は，東京帝国大学におけるハーンの講義「昆虫に関するギリシアの古い詩（Old Greek poetry about insects）」[4)]の中で言及されているが，文面が全く同一であり，ハーン自身は講義の中で出典を明らかにしていないものの，この英訳版『ギリシア詞華集』からの引用であることは間違いないであろう。この詩は，数々のセミに関する詩を紹介したうえで，さらに加えてこの詩を紹介する形で，「クモの巣に捕らえられ，詩人自身が助けに行くまでそこで鳴いていた昆虫を表した詩（represents the insect caught in a spider's web and crying there until the poet

himself came to the rescue)」という導入とともに引用されている。これだけならば単なるギリシアの詩の紹介に終始するのであるが，この詩を引用した後でハーンは，「極東の詩人たちと同様，ギリシアの詠み手たちはセミの無害さをとりわけ称揚していた（Like the poets of the Far East, the Greek singers especially celebrated the harmlessness of the cicada)」と，セミを愛でる態度に日本と古代ギリシアの詩人の感性の相同性があることを指摘している。

2－2. 293頁

293頁の詩は，ムナサルカスの詩で，裏見返しの書き込みに「×293 - Died locust（死んだキリギリス)」とあるように，死んだキリギリスを悼む墓碑銘である。【写真2】のように，この詩の右上余白には，鉛筆書で斜めに線が引かれている。



CCCCXIX. MNASALCAS.

No more with wings shrill-sounding shalt thou sing, O locust, along the fertile furrows settling; nor me reclining under the shady foliage shalt thou delight, striking, with dusky wings, a pleasant melody.

Oh! never more, thou locust, shalt thou, with shrilly wing, Along the fertile furrows sit, and thy gladsome carols sing:

[1]—[1] What Æschrion meant by τοὺς κάτω κούρους Jacobs has not even attempted to explain; for he probably suspected some corruption here, which it would not be difficult to correct.

[2] On the formula ἔγραψεν οἵ' ἔγραψεν, see Blomf. Ag. 66.

[3] In lieu of ἔγραψεν ἐγὼ δ'—Planudes has ἔγραψεν αὐτὴ δ'—which plainly leads to ἔγραψε· τοιάδ'—

【写真 2】

以下に詩の内容を確かめておきたい。

> No more with wings shrill-sounding shalt thou sing, O locust, along the fertile furrows settling; not me reclining under the shady foliage shalt thou delight, striking, with dusky wings, a pleasant melody.
>
> もはやお前は羽をすり合わせて歌うことはない。おおキリギリスよ，もはや肥沃な畝に沿って留まり，葉陰で憩う私を喜ばすこともない，暗褐色の羽を打ち合わせて，心地よい旋律を奏でて。

これは詩人が死んでしまったキリギリスを悼んで，キリギリスに語りかけるという趣向で作られた碑銘詩であるが，このような詩が本当にキリギリスの死を悼んで歌われたというよりは，そのような趣向で詩を読むことが古代ギリシアにはよく行われていたことはすでに見たところである[5)]。

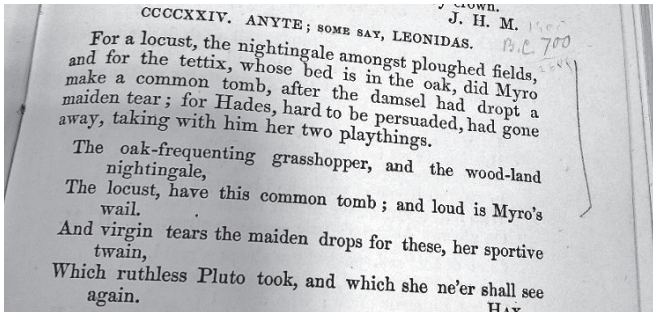
詩の番号こそ異なっており，また英語の内容とフランス語の内容に若干の差異が見られるものの，この詩は，ヘルン文庫所蔵のフランス語版の『ギリシア詞華集』[6)]でやはり書き込みのあった，192番のムナサルカスの詩と同じものであると思われる[7)]。そして，この詩もまた『講義録』において，「我々はやはりしばしばギリシアの詩人が日本の詩人のように，秋の虫に心を寄せ，その死を嘆くさまを目にする（Occasionally too we find the Greek poet like the Japanese,

compassionating the insects of autumn, and lamenting for their death)」(443頁) と，その詩情の相同性に言及しながら引用されているのである。

2－3. 295頁および345頁

裏見返しに「× 295 - little girl's grief(小さな少女の嘆き)」とある295頁の詩と「× 345 –Myro(ミロ)」とある345頁の詩は，裏見返しでも大きな片括弧を思わせるような弧で結ばれている。したがってここでこれらの詩を二つまとめて確認しておきたい。

295頁には，アニテまたはレオニダス作ともいわれる詩が収められており，該当頁の右余白には，【写真3】のように，鉛筆で縦に傍線が引かれているほか，その上部に数字の書き込みが見られる。



CCCCXXIV. ANYTE; SOME SAY, LEONIDAS. J. H. M.

For a locust, the nightingale amongst ploughed fields, and for the tettix, whose bed is in the oak, did Myro make a common tomb, after the damsel had dropt a maiden tear; for Hades, hard to be persuaded, had gone away, taking with him her two playthings.

The oak-frequenting grasshopper, and the wood-land nightingale,
The locust, have this common tomb; and loud is Myro's wail.
And virgin tears the maiden drops for these, her sportive twain,
Which ruthless Pluto took, and which she ne'er shall see again.

【写真 3】

右上の数字は，鉛筆書きで，BC700と鮮明に見えるものの上に，薄く消されたような跡で1900，下に2600という数字がかすかに見える。これは，これまでにもあったように，1900という数字は，おそらくハーンがこの書き込みを行った年，すなわち1900年を示し，下の2600という数字は，鮮明に見えるBC700と1900の差，すなわち2600年前ということを示しているものと思われる。BC700が何を示すものか不明であるが，おそらくアニュテの生年なのではないかと思われる。

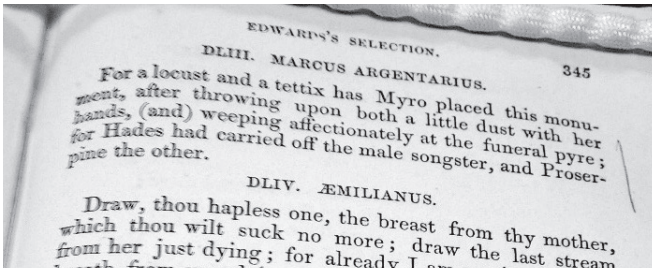
以下にその内容を確認しておきたい。

> For a locust, the nightingale amongst ploughed fields, and for the tettix, whose bed is in the oak, did Myro make a common tomb, after the damsel had dropt a maiden tear; for Hades, hard to be persuaded, had gone away, taking with him her two playthings.
>
> 耕された畑の夜啼鶯であるキリギリスのために，そして，樫の木を寝床とするセミのために，ミロは一緒の墓を作った。少女の涙をこぼした後に。というのも，呵責なきハーデスが，彼女の二匹の愛玩物を奪っていってしまったから。

この詩も，ヘルン文庫所蔵のフランス語版ギリシア詞華集でも傍線の書き込みのあった詩である[8)]。この詩の中にもミロという少女[9)]に言及があるが，345頁のマルクス・アルゲンタリウスの詩も同じくミロへの言及のある同じ趣向の詩なので，ここで併せてみておくことにし

たい。

この詩もまた，【写真4】に見られるように，右余白に鉛筆で傍線の書き込みがあるが，以下にその内容を確認しておきたい。



EDWARDS'S SELECTION.

DLIII. MARCUS ARGENTARIUS. 345

For a locust and a tettix has Myro placed this monument, after throwing upon both a little dust with her hands, (and) weeping affectionately at the funeral pyre; for Hades had carried off the male songster, and Prosepine the other.

DLIV. ÆMILIANUS.

Draw, thou hapless one, the breast from thy mother, which thou wilt suck no more; draw the last stream

【写真４】

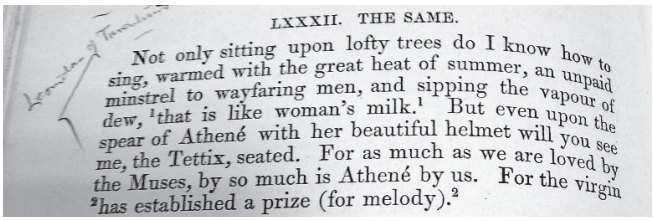
For a locust and a tettix has Myro placed this monument, after throwing upon both a little dust with her hands, (and) weeping affectionately at the funeral pyre; for Hades had carried off the male songster, and Prosepine the other.

キリギリスとセミのためにミロはこの碑を，墓場でいとおしむように涙を流しながら両者の上に自らの手で砂をかけたのちに作った。オスの歌い手はハーデスが奪い，他方はプロセルピナが奪っていったためである。

ハーデスは冥界の王，プロセルピナはその妃であり，この箇所のみが先の詩と異なるが，ミロへの言及といい，その行為といい，全く同じ題材が詩に詠われているということに疑いの余地はない。そして，この二つの詩もまた『講義録』の中で紹介されていることはすでに見たところである[10]が，ここで注目すべきは，アニュテのものとされる295頁の詩を紹介する際にハーンが，「ここに紹介するのは，2600年前の小さな詩で，シチリアのギリシアの少女でアニュテという名前の女性詩人によって作られたものである（Here is a little poem 2600 years old, written by a Greek girl of Sicily, a poetress named Anyté）」（440頁）と述べていることである。ハーンはこの詩を引用した後でも，「(How freshly do the tears of this little girl still shine to-day ― after the passion of 2600 years!)」（440頁）と感嘆しており，2600年の時の隔たりを強調していることが分かる。2600という数字は先で見た書き込みに見られる数字であり，書き込みはこの講義での言及を用意するためのものであった可能性が高いと言えるのではないだろうか[11]。

2－4. 458頁

この頁は，裏見返しでは「×458- not only…（×458　だけでなく）」と詩の冒頭の語句がメモされているが，該当頁には，【写真5】のように右肩に鉛筆で斜めに線が引かれ，「タレン



LXXXII. THE SAME.

Not only sitting upon lofty trees do I know how to sing, warmed with the great heat of summer, an unpaid minstrel to wayfaring men, and sipping the vapour of dew, [1]that is like woman's milk.[1] But even upon the spear of Athené with her beautiful helmet will you see me, the Tettix, seated. For as much as we are loved by the Muses, by so much is Athené by us. For the virgin [2]has established a prize (for melody).[2]

【写真 5】

トニオスのレオニダス（Leonidas of Tarentinos）」と書き込みがある。この書き込みは，この箇所で作者の名前が「同一（The same）」となっていて，かなり前の頁を参照しなければこの作者のものであるということが分からなくなっているからであると思われる。

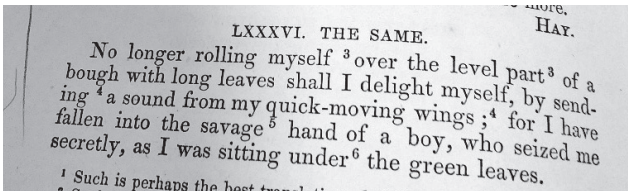
以下にその内容を検討しておきたい。

> Not only sitting upon lofty trees do I know how to sing, warmed with the great heat of summer, as unpaid minstrel to wayfaring men, and sipping the vapour of dew, that is like woman's milk. But even upon the spear of Athené with her beautiful helmet will you see me, the Tettix, seated. For as much as we are loved by the Muses, by so much is Athené by us. For the virgin has established a prize (for melody).
>
> 歌をよくする私は，背の高い木の梢に留まり，夏の酷暑に身を熱くして歌を歌う旅人たちの無給の吟遊詩人，女の乳に似た露の蒸気を啜るだけではない。ある時は，かの美しい兜を被ったアテネの槍の上に私，セミが坐っているのをあなたたちは見るだろう。詩女神たちに愛されているのと同じくらい，私はアテネにも愛されているのだ。かの処女神は（旋律のために）賞を設けたのだから。

この詩もまたハーンは『講義録』の中で，「セミと英知の女神との関係をより決定的に物語る（more definitely about the relation of the insect to the Goddess of Wisdom）」詩として紹介している（441頁）。ハーンによれば，「セミはギリシアのある地域では宗教的な崇拝を受けており，知恵の女神のお気に入りの昆虫であったと信じられていた（the cicada received religious respect in same part of Greece; it was believed to be the favourite insect of the Goddess of Wisdom）」（441頁）と述べている[12)]。

2－5. 460頁

裏見返しに「× 460 – boy cathes（× 460　少年がつかむ）」とある460頁にも，【写真6】にあるように，左余白に鉛筆で縦に傍線が引かれている。



LXXXVI. THE SAME.

No longer rolling myself [3] over the level part [3] of a bough with long leaves shall I delight myself, by sending [4] a sound from my quick-moving wings; [4] for I have fallen into the savage [5] hand of a boy, who seized me secretly, as I was sitting under [6] the green leaves.

[1] Such is perhaps the best

【写真 6】

この詩についても内容をまず確認しておきたい。

> No longer rolling myself over the level part of a bough with long leaves shall I delight myself, by singing out the song from my quick-moving wings; for I have fallen into the savage hand of a boy,

who seized me un expectedly, as I was sitting under the green leaves.

もはや私は枝の高みに留まって，羽の素早い動きで歌を奏でながら楽しむこともできない。というのも私は野蛮な少年の手のうちに落ちてしまったので。この子は私が緑の葉陰に留まっていた時に，ふいに私を掴んでしまったのだ。

この詩もまた『講義録』の中で，先に見たミロの詩と対比させる形で，「古いギリシアの少女たちがこのように優しい心根であるのに対して，残念ながら少年たちはそうではなかった，ということを諸君に言わなければならない（if little girls in old Greece were so tender-hearted as this, I am sorry to tell you that little boys were not）」（440頁）と前置きしたうえで，「今日の東京の少年たちのように，彼ら（古代ギリシアの少年たち）も，セミを捕まえて情け容赦ない（They caught cicadae much as little boys in Tokyo to-day catch *semi*, and they were not very merciful）」（440頁）として引用されている。ここでもまた古代ギリシアの少年の行動とハーンの講義と同時代の東京の少年の行動が相同するものとして論じられていることに着目しておきたい。

こうして見てくると，裏見返しに書き込みのあったセミとキリギリスに関する詩は，すべてハーンの『講義録』の中で引用されている詩であるということが分かり，書き込みに見られる傍線や数字，人名などは，講義を準備するために記された可能性が高いということも分かる。また，裏見返しの書き込みの配列順は頁の若い順に配列されているが，講義では必ずしもその順番で引用されているのではなく，講義としての論の展開によって配列順が異なっていることが分かる。しかしたとえば「タレンティノスのレオニダス」の名前など，書き込みにはあっても講義中では挙げられていないものもある。また，ハーンが，帝大生を聴衆とした講義では古代ギリシアの昆虫に関する詩を英語で紹介し，古代ギリシアの詩人の虫を愛ずる感性が日本のそれと通底するものであることを指摘しているのに対して，それが不特定多数の英語圏の読者を対象とするエッセイの中ではどのように論じられているかについても確認しておく必要があるのではないかと思われる。以下に，1900年に発表された『影（*Shadowings*）』に収められた「日本研究」のうちの一つであるエッセイ「セミ（Sémi）」の中で，日本のセミに関する発句を紹介する前置きとして，古代ギリシアの詩人たちに言及している箇所を確認しておきたい。

3.「セミ」における古代ギリシアの詩への言及

このエッセイは，陸雲による「蝉の五徳」の紹介ののちに，「我々はこれを，2400年前に書かれたセミに捧げられたアナクレオンの美しい呼びかけと比較してみることもできる（we might compare this with the beautiful address of Anacreon to the cicada, written twenty-four hundred years ago）」[11] としてアナクレオンのセミに関する詩を引用している。英訳版『ギリシア詞華集』の該当頁の書き込みでは，2350と年代がさらに細かく書き込まれていたものの，このエッ

セイでは「2400年前」とされているが，これは読者の便宜を考えてのことであろう。気楽に読むエッセイの読者を想定して，およその年代が分かればよい，という判断に立ったのではないかと考えられるのである。ハーンはここでさらに，「一つ以上の点において，このギリシアの詩人は中国の哲人と完全な相同性を示す（on more than one point the Greek poet and the Chinese sage are in perfect accord）」とも述べており，アナクレオンの詩の内容に，陸雲の見解と通底するものを見出していることが述べられている。

アナクレオンの詩の引用に続いてハーンはまた，「音楽を奏でる昆虫について書かれた日本の詩に比肩するものを見つけるには，古いギリシア文学まで遡らなければならない（we must certainly go back to the old Greek literature in order to find a poetry comparable to that of the Japanese on the subject of musical insects）」（46頁）ことを述べたうえで，メレアグロスのキリギリスに関する詩をギリシア詩の中でも最も美しい詩としてそのさわりの部分「おお，キリギリスよ，不眠の慰めよ，声のより糸を織りなし，そぞろ歩きを誘う（O cricket, the soother of slumber… weaving the thread of a voice that causes love to wander away!”）」を引用している。この詩もまた英訳版『ギリシア詞華集』の該当頁に傍線の書き込みのあった詩であり，『講義録』でも引用されているもので，講義の中ではハーンはとりわけ「声のより糸を織りなす（weaving the thread of a voice）」という表現を「この虫の声を夜聞くことで詩人はその悩みを忘れることができる。「声のより糸」という表現は，小さなこの虫の「かそけき」特質とでも今日我々が呼びうるものをいみじくも表現している（Listening to the charm of the insect's song at night the poet is able to forget his troubles. The expression,“thread of a voice” exquisitely represents what we would call to-day the“thin” quality of the little creature's song）」と詳しく解説している（439頁）。またハーンはこのメレアグロスの詩の末尾の「お前の口に合わせて小さく切り取った露の雫と新鮮なネギを見返りに贈ろうという誓い（promise to reward the little singer with gifts of fresh leek, and with “drops of dew cut up small,”）」を，「奇妙に日本的なものに思える（sounds strangely Japanese）」と述べている。

次に引用されるのは，アニュテのセミとキリギリスの死を詠んだ詩であり，「呵責なきハーデスが彼女の愛玩物を奪った（Hades, hard to be persuaded, had taken her playthings away,）」ために　ミロがその死を嘆いて墓を作ったことを，「日本の子供の生活には馴染みの深いものである（familiar to Japanese child-life）」と述べている（WLH, p. 46）。この詩もまた『講義録』でも言及されているものであり，ハーンはここでも『講義録』と同じように，「2700年を隔てても彼女の涙が如何に生々しくこぼれていることか（how freshly her tears still glisten, after seven and twenty centuries!）」と驚いて見せている[12)]。以下このエッセイでは，「日本の少女が今日でもその墓の上に小さな石を置く（the little maid of Nippon would do to-day, putting a small stone on top to serve for a monument）ことを説明しているが，さらに「しかし日本のミロはさらに賢く，墓

の上にさらに念仏を繰り返し唱えるだろう（But the wiser Japanese Myro would repeat over the grave a certain Buddhist paryer.）」と付け加えている。

これに続けて引用されているのは，クモの巣に捕らえられて，「詩人によって解放されるまでそのか細い脚で嘆いている（making lament in the thin fetters until freed by the poet）」セミと，「背の高い木の梢に留まり，夏の酷暑に身を熱くして歌を歌う旅人たちの無給の吟遊詩人，女の乳に似た露の蒸気を啜る（unpaid minstrel to wayfaring men” as sitting upon lofty trees, warmed with the great heat of summer, sipping the dew that is like woman's milk）」というタレンティヌムのレオニダスの詩であり，いずれも『講義録』でも引用されているものであると同時に，英訳版『ギリシア詞華集』の裏見返しに書き込みのある詩である。また後者の作者名「タレンティヌムのレオニダス」は，該当頁に名前の書き込みがあるものの『講義録』では言及されていなかったが，このエッセイでは名前が示されているということも確認しておくべきであろう。

これに続けてエッセイで言及されている詩は，メレアグロスのセミに関する詩であり，その前半部分が「汝詠う蝉よ，露の雫を飲み，鋸状の肢で花びらの上にとまり，お前の暗褐色の肌から竪琴の旋律を奏でる（Thou vocal tettix, drunk with drop of dew, sitting with thy serrated limbs upon the tops of petals, thou givest out the melody of the lyre from thy dusky skin…）」と引用されているが，これも英訳版『ギリシア詞華集』で書き込みのあった詩であり，『講義録』でも引用されている詩である。

次に言及されているのはエヴェヌス作とされる詩で，これは『講義録』でも特権的な地位を与えられているが，ここでも全文が引用されている。この詩についても英訳版『ギリシア詞華集』に，『講義録』の内容を裏付ける重要な書き込みがあったことは先に見た通りである[13)]。

このあとエッセイでは，日本ではセミの声（音）よりはキリギリスの声を称揚する詩が多く，セミを詠った詩は多いもののその歌をほめたたえている詩は少ないことを述べたうえで，ギリシアのセミと日本のそれが大きく異なることが説明され，日本のセミについて，「いくつかの種類は確かに音楽的（Some varieties are truly musical）」であるものの，「大多数は驚くほどうるさく，あまりにもうるさいので，その生み出すキイキイという音が，夏の多大なる責苦の一つと考えられている（the majority are astonishingly noisy – so noisy that their stridulation is considered one of the great afflictions of summer）」とまで述べられている。随筆家ハーンはここで，「したがって，日本の数多くの詩の中に先に引用したエヴェヌスの詩に比肩しうるものを見つけることはできなかった（Therefore it were vain to seek among the myriads of Japanese verses on semi for anything comparable to the lines of Evenus above quoted）」と述べている。確かにハーンはほかの箇所でも述べている通り，日本の酷暑のセミの声をうるさいものととらえていたことは分かるが，それでは2歳までしか過ごさなかったギリシアのセミの声を，日本のそれとは異なる好ましいものとして覚えているのだろうか。ここではそのような幼児期の聴覚の記憶の確かさを

云々するよりも，『ギリシア詞華集』のおもに碑銘詩によって喚起される，はかない存在としてのセミの姿がハーンにとっての「ギリシアのセミ」のイメージを形成しているということのみを確認するに留めたい。『ギリシア詞華集』によって示されるかそけきセミのイメージは，ハーンの中に独特の，必ずしも仏教思想のみから醸成されたとは言えない無常観を形成し，ハーンにとっての好ましき母なる国，しかし生涯二度と訪れることのなかったギリシアのイメージの根源ともなっているのではないかと思われるからである。

この後エッセイでは，「あな悲し鳶にとらるる蝉の声」[14] という日本の嵐雪の発句が紹介されているが，これに続けて，「あるいは「少年に捕まえられた」としても詩人は読んでもよかったかも知れない。というのもその方がよりしばしば哀切な鳴き声の原因となりうるからだ（Or “caught by a boy” the poet might equally well have observed – this being a much more frequent cause of the pitiful cry）」とコメントを加えているが，これは，小論で見てきたように，『講義録』でも言及され，英訳版『ギリシア詞華集』でも書き込みのある，少年に捕らえられたセミの詩を次に引用する呼び水となっているのである。これに続いて，日本の子どもたちがセミを採る方法についての説明がある。

> Here I may remark that Japanese children usually capture semi by means of a long slender bamboo tipped with bird-lime (mochi). The sound made by some kinds of semi then caught is really pitiful – quite as pitiful as the twitter of a terrified bird（*WLH*, p. 48）.
>
> ここで私は日本の子どもたちが通常はセミを長細い竹の先に鳥もちを付けてとらえることを明記しておきたい。こうして捕らえられるセミのうちのいくつかの種類のものが本当に哀れな音を出すのである。まさに危機に瀕した鳥がさえずるのと同じくらい哀れな音である。

この説明もまた，このエッセイが，日本の習俗を知らない英語圏の読者に向けられたものであり，また，英語圏，とりわけ英国や北米では，セミは決して身近な昆虫ではなく，その声を聴いたこともなく，ましてやその声がうるさくて耐え難い，といった体験を持つ読者は数少ないところで語られているということを考慮すれば，日本の珍しい風物を，それと同じく南に位置するギリシア，しかも欧米的な教養のキャノンである『ギリシア詞華集』に詠われた文学的なセミの声と対比させながら読者にイメージさせる。

これに続きエッセイでは，セミや虫の音を発する器官が，本来は「声」ではなく，羽を震わせて出す「音」であることを説明し，日本の詩歌でそのことを正しく述べているものを未だ見つけていないと言いながら，古代ギリシアでも「古いギリシアの詩人たちも虫がその羽や肢で音楽を奏でると実際に述べていながら，日本の詩人と同様にそれらの虫の「声」とか「歌」に

ついて語っている（The old Greek poets who actually describe insects as producing music with their wings and feet, nevertheless speak of the “voices,” the “songs,” and the “chirruping” of such creatures – just as the Japanese poets do）」（*WLH*, p. 50）と述べ，最後にメレアグロスのキリギリスに関する詩の一節を「おお汝羽を打ち震わせて竪琴の音色を自ら真似，肢で声を出す羽を叩いて何か心地よい旋律を奏で私を慰めておくれ（O thou that art with shrill wings the self-formed imitation of the lyre, chirrup me something pleasant while beating your vocal wings with your feet!...）」（*WLH*, p. 50）と挙げている。これまでに見たようにこの一節が含まれるキリギリスの詩も，英訳版『ギリシア詞華集』において書き込みのあった詩であり，『講義録』でも言及されているそれであることは言うまでもない。

おわりに代えて

こうして見てくると，ハーンはこの英訳版『ギリシア詞華集』を1900年前後に読んで書き込みを残し，それをもとに「セミ」のエッセイの導入部を執筆し，やがて東京帝国大学の講義でもそれを講じたが，詩の紹介の順番はそれぞれの効果を考えて入れ替えている，ということが分かる。もちろん，中等教育において，ヨーロッパ19世紀の教養を十分に蓄え，アメリカ時代の新聞の文芸コラムでも『ギリシア詞華集』にしばしば言及しているハーンにとって，来日後に購入したヘルン文庫所蔵の英訳版や仏訳版の『ギリシア詞華集』が，初めてこれら古代ギリシア人の詩に接した機会ではなかったであろう。

しかし，ここで重要なのは，それら古代ギリシアの詩が，ハーンの中で日本のそれと分かちがたく結びついて独特の世界観を形成したことであり，これまで見てきたように，それはおそらくハーンが来日よりはるか以前の1883年頃に出会った「きりぎりす鳴くや霜夜のさむしろに衣かたしきひとりかも寝む」の歌がきっかけであったことは疑いない[15)]。

ともあれ，ヘルン文庫所蔵の英訳版および仏訳版『ギリシア詞華集』の書き込みが，エッセイや講義を準備するためのメモ書きであり，そのような書き込みの習慣は，アメリカでの新聞記者時代にすでに原則が確立され，来日後も同じ原則に従って行われていたことが例証されつつあるということは確かなのではないだろうか。

今回は英訳版『ギリシア詞華集』裏見返し左側の記述のうち後半部分のセミとキリギリスに関する詩のみを取り上げて論じたが，他の詩について，また，裏見返し右側の書き込みのある詩にしてはさらに稿を改めて論じ，同詞華集における書き込みの全容を明らかにすることにしたい。

注

1）同書左側の裏見返しの書き込みの 284 頁以前のものについては，拙稿「ラフカディオ･ハーン旧蔵書『ギリシア詞華集』英語版の書き込みについて①」『富山大学人文学部紀要』第 68 号，2018 年 2 月，155-170 頁を参照されたい。

2）『ギリシア詞華集』に収められた碑銘詩では，セミとキリギリスはしばしば併せて語られることが多い。詳しくは拙稿「ラフカディオ・ハーン旧蔵書『ギリシア詞華集』仏訳版の書き込みについて―昆虫譚と幽霊妻をめぐって―」『富山大学人文学部紀要』第 66 号，2017 年 2 月，175-189 頁を参照のこと。なお，『ギリシア詞華集』の内容の検討，訳出については，沓掛良彦訳『ギリシア詞華集 2』京都大学出版会，2016 年を参考にさせていただいた。

3）本文引用中，（　）に入れて示した文字は，印刷の不備のためか，同書の該当頁右側が 1 字分欠けていた箇所を筆者が類推により補ったものである。

4）ハーンの講義録については，*Complete lectures on poetry by Lafcadio Hearn*, edited by Ryuji Tanabé, Teisaburo Ochiai and Ichiro Nishizaki, Tokyo, The Hokuseido Press, 1934.（以下，『講義録』とする）により，頁数のみを示す。この言及は，『講義録』443 頁にある。

5）前掲拙稿「ラフカディオ・ハーン旧蔵書『ギリシア詞華集』仏訳版の書き込みについて―昆虫譚と幽霊妻をめぐって―」『富山大学人文学部紀要』第 66 号，2017 年 2 月，181 頁を参照のこと。

6）ヘルン文庫所蔵のフランス語版『ギリシア詞華集』は，書架番号 [1641] と [1642] Anthologie Grecque, Tome I-II, traduite sur le texte publié d'après le manuscrit palatin par Fr. Jacobs, avec des notices biobliographiques et littéraires sur les poëtes de l'anthologie, Paris, Hachette, 1863 の二巻本である。

7）同上拙稿，177 頁を参照のこと。

8）同上拙稿，177 頁を参照のこと。なお，仏訳版は散文訳のみが示され，英訳版は散文訳が示された後韻文訳が示されているが，ハーンの傍線は基本的に散文訳の部分にのみかかっているものがほとんどであり，詩の内容に重点がおかれているものと判断されるので，小論では散文訳のみを引用している。

9）この少女についてハーンは本当に古代ギリシアの少女と考えていたようであるが，前出『ギリシア詞華集』翻訳者の沓掛良彦は，アニュテと同時代の女性詩人モイロのことだとしている。これについても同上拙稿 181 頁を参照のこと。

10）前掲拙稿「ラフカディオ・ハーン旧蔵書『ギリシア詞華集』仏訳版の書き込みについて―昆虫譚と幽霊妻をめぐって―」『富山大学人文学部紀要』第 66 号，2017 年 2 月，181 頁を参照のこと。

11）沓掛によれば，アニュテはミロ（モイロ）と同時代の人であり，モイロが前 300 年頃の人であるからアニュテも前 300 年頃の人であるということになり，ハーンの書き込みの BC700 という数字は有効性を持たないことになるが，ハーン自身は何らかの典拠によりアニュテの生年（またはここで引用された詩が詠まれた年代）を前 700 年と理解していたということであり，2600 年の時を隔てても同様の感懐を読者が抱きうることを強調したかったのであろう。

12）このような古代ギリシアにおける知恵の女神（アテナ）とセミの関係について，ハーンがどのようなところから着想を得たのかについては今のところ不明である。

13）このタイトルの書き方（「セミ（Sémi）」）からも，ハーンがフランス語に通じていたこと，英語圏の読者にも「セミ」の正しい発音を伝えるためにアクサン･テギュを付加したのであろうことが類推できる。

14）以下，エッセイの引用は，*Works of Lafcadio Hearn*, vol. 10, Shadowings and A Japanese Miscellany, Boston and New York, Houghton Mifflin Company, 1922. により，以下書名を慣例に従って *WLH* とし，頁数を示す。

15）アナクレオンの詩の引用の末尾に原文では脚注がついており，「この詩および他の『ギリシア詞華集』からの引用については，私はバージェスの翻訳に依拠した（In this and other citations from the Greek anthology, I have depended upon Burges' translation）」（46 頁）とあり，この箇所の記述についてバー

ジェスの『ギリシア詞華集』を参照する必要性が示唆されている。このバージェスの版こそヘルン文庫所蔵の英訳版であり，小論で解明しようとしていることは，すでにハーンがこの注で示唆していることが分かる。ちなみに平井呈一訳では，この注は訳されていない。

16）ここでその年代が書き込みおよび『講義録』の 2600 年から 2700 年に増えているのは，効果を考えて誇張されたためであろうか。

17）これについては拙稿「ラフカディオ・ハーン旧蔵書『ギリシア詞華集』英語版の書き込みについて①」『富山大学人文学部紀要』第 68 号，2018 年 2 月，159-160 頁を参照のこと。

18）ここでもハーンは，他の発句（俳諧）の紹介と同様，まずその音写をアルファベットで示し（Ana kanashi! / Tobi ni toraruru / Sémi no koë / RANSETSU），それに続けて英語で内容を説明する（Ah! How piteous the cry of the semi seized by the kite!），という体裁をとっている。ここでも，アルファベットの転写におけるアクサンやトレマの用い方に，ハーンがフランス語をよくしたことの証拠を見て取ることができるし，クレオール語の聞き取りで会得した未知の言語を書き取るときの方法が反映されているものと言える。

19）これについては拙稿「ラフカディオ・ハーンのニューオリンズ時代における 日本との出会い ―「日本の詩瞥見」をめぐって―」『富山大学人文学部紀要』第 67 号, 2017 年 8 月, 153-167 頁を参照のこと。

本稿は，科学研究費補助金（16K13215）の助成による研究成果の一部である。